

## 英語教授法について

山本淳子

英語科教育法の授業で、様々な教授法について学生とともに学んでいる。というのは私自身、教科書や英語教育用語辞典にある教授法をすべて経験しているわけではないので、教えながら自らもその教授法の歴史や現状についての理解に努めているからである。

なじみの深い教授法はいうまでもなく「文法訳読法」である。私の英語力（というほどのものではないが）はこれで身につけたものである。なにせ中学校、高校と教科書を使ってのロールプレイはあったかもしれないが覚えていない。ましてやスピーキングの練習などしていないはずである。当時は何の疑いもなく、一文一文教科書の英文をノートに書き写しそれぞれを正確に訳して英文の下に日本語訳を書いていた。このように英語を「解読」することが英語の勉強だと思っていた。これができていればよい点数が取れるからであろう。

この文法訳読法は英語で、Grammar Translation Method といい、頭文字から GTM と称されている。GTM は、コミュニケーション能力の育成には向いていないとされ、日本人が英語を話せないのは GTM のせいにされることも多い。しかし、そこまで悪者にされるいわれもない気もする。GTM はそれなりに英語教育の中で重要な役割を果たしてきたと考える。コミュニケーション重視の指導法が主流になりつつある今、正確なグラマーの理解が求められる GTM の良い部分は取り入れていけば良いと考える。

英文の要点をつかんで素早く理解するのと、細かいニュアンスまで正確に理解するのでは求められるスキルが変わってくる。前者は、段落構成を意識し概要を把握する力が求められ、後者では、翻訳者に求められるような高い読解能力や文法能力が必要となる。GTM で培った力は、難解な文学を読み進めるときに随分と頼りになるのではないだろうか。

重要なことは、一つに偏ることなくバランスよく教授法を組み合わせることだと思う。学生に人気なのは、Total Physical Response (全体反応教授法) や、Jazz Chants (チャンツ)、CLT (コミュニケーションのための言語教育) などである。すべての教授法を理解し、それぞれ良いところを組み合わせ効果的な授業を組み立てていけるよう指導していきたい。

---

(やまもと・じゅんこ 教授/教員養成センター)

---